

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06109

研究課題名(和文) 戦後台湾の先住民族社会と同化政策に関する研究

研究課題名(英文) Indigenous society and assimilation policy on Post-War Taiwan

研究代表者

森田 健嗣 (MORITA, Kenji)

東京大学・大学院総合文化研究科・教務補佐員

研究者番号：20761422

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では戦後台湾における脱日本化について論じた。韓国との比較を行いつつ、戦後台湾では脱植民地化が代行されたという視角から論を進めた。なかでも脱植民地化の有り様を説明する題材として相応しい学校教育の検討や、先行研究では触られていない視点、すなわち脱植民地化が代行されたゆえに、植民地時期生まれの世代と戦後世代の間で記憶が継承されず断絶したという点から再考する。そして戦後台湾では「日本」はあまり批判すべき対象とならず、「他者化」して国民統合の機能を果たさなかったことを指摘した。

研究成果の概要(英文)：This study discusses the "De-Japanization" of post-war Taiwan from the perspective of vicarious decolonization. Further, this study refers to the example of post-war Korea, which was under the Japanese colonial regime. The decolonization of Taiwan progressed vicariously through the Sinicization. The ruler's historical background and the enemy's characteristics were taught in schools; however, the memorization-based education and experience in colonial Taiwan did not sustain and went obsolete in schools, also it could not be shared with the younger generation in families. The will of "De-Japanization" of Taiwanese who ruled over colonial Japan was not expressed. Therefore, "Japan" did not find an "enemy" in post-war war Taiwan, also "Japan" was relativized in post-war Taiwan.

研究分野：中国語圏地域研究

キーワード：台湾 先住民族 同化政策 マイノリティ

## 1. 研究開始当初の背景

戦後台湾の先住民族社会と同化政策について、先行研究(先住民族の社会的リーダー階層研究、山地行政史研究、対先住民族法令研究、先住民族社会と言語政策・教育政策に関する研究等)をふまえても、まだ全体像を見渡せるとは見えなかった。理由として次が挙げられる。

(1) 戦後台湾史研究は平野部(主に漢族が居住)で起きた事象に注目し、山間部(主に先住民族が居住)の社会でおきた出来事あまり関心を寄せてこなかった。

(2) 今日の課題である先住民族文化や言語の復興といった実践的研究活動に大きな関心が置かれている。

(3) 戦後台湾の山間部に関する歴史的資料の公開がこれまで不十分だった。

しかし近年、台湾の公文書館で、山地を所管する台湾省民政庁、各地方政府により記された歴史的公文書の公開が徐々に始まっている。また、山地行政当事者により記された文書公開も始まったと伝えられた。こうした順次公開されている資料を博そうし、その中身を十分に把握、検証していく。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は戦後台湾の先住民族社会(山間部に居住)における「山地平地化」と称された漢民族文化への同化政策(1950年代~80年代)の展開について、歴史的経緯にそくし全体像を明らかにすることである。本研究目的を達成すべく、次の研究の手順を立てた。

(1) 拙論(「台湾先住民族社会の戦後過程」『アジア・アフリカ地域研究』第15-1号、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科、2015年)が若干示した為政者は戦後初期山間部での統治には消極的だった、という事実について、近年公開が始まった一次資料(所管官庁高官の文書)により論証する。

(2) 1950年代以後の国民党中央政府の台湾移転後、一転して「山地平地化」と称される漢民族文化への同化政策が強力に押し進められたが、ではそのための施策はいかなるものであり、いかに先住民族独自の文化等が消失していったかを明らかにする。その作業として、山地と平地の統治体制の異同(体制、形式面、行政人員の能力や遂行面)や、為政者が統治の為に先住民族をうまく懐柔するキリスト教を利用した点について、発掘した一次資料に基づき分析を行う。

(3) 上の2.(2)に関連するが、これまで1950年代以後の先住民族への同化政策の展開は、平野部よりも厳しかったと言われてきたが、それはなぜか。そしてそれはどのような点か。平野部では漢民族文化が日本時代から確固として存在し、それが抵抗の基盤となった。ところが山間部では先住民族文化による統治者への抵抗の基盤が微弱だったため、同じ厳しさでも打撃がより大きかった

のではないかと、という問いへの答えを一次資料等に基づいて導き出す。

(4) 従来、先住民族は圧倒的な人口の少なさゆえに同化政策の過程で固有文化の瓦解が起きた、と簡略的に説明されてきた。だが違いは人口規模ではなかった。戦後の為政者(国民党政権)が台湾に持ち込んだ同化政策は、平野部、山間部ともに推進されたが、推進された文化の内実と台湾平野部の在来の文化は、どちらも広く漢民族文化(漢字使用、生活様式、貨幣経済等)に属した。それに比して、山間部の先住民族の固有文化は、日本への同化を経験したとはいえ、漢民族文化の圏内にはほとんど収まらない異質性をもっていた。このような為政者が強制した文化と平野部・山間部それぞれの社会の固有文化との距離の違いを視野に入れて考察する。

こうした作業をへて、台湾山間部における日本植民地統治期から戦後の国民党一党支配時期にかけての連続した同化政策の全体像が明らかになると予想された。

## 3. 研究の方法

台湾の人類学研究者、歴史学研究者等との研究交流を進めつつ、最新の資料公開情報に留意しつつ、一次資料、二次資料収集などを組み合わせて研究活動を行う。そのため、台湾の各文書館に頻りに足を運び、資料の発掘につとめ、研究内容を発信していく。報告の場で得た知見を社会に還元しつつ触発を受け、今後展開する研究のヒントとなる論点を学び、論文執筆を進める予定とした。

だが本研究課題の研究遂行に不可欠の一次資料である楊肇嘉(1892~1976)(1950年代の山地行政を主管する台湾省民政庁の長をつとめた)の個人文書「六然居典藏史料」(所蔵先:台湾・中央研究院台湾史研究所)の公開が遅延する旨の連絡が届いた。そこで上記資料の調査を行うかわりに次の作業を進めた。

近年、台湾の歴史学界では戦後(1945年以後)の先住民族がおかれた歴史に関心が向きつつある。そこで台湾の学術誌掲載論文はもとより、台湾の学界で先端的な問題提起や資料・史料発掘が見いだせる修士論文レベルまで拡げて二次文献を徹底的に収集することにした。さらに、当時の山地社会を経験した人々の回想録を博そうし、戦後の国民党政権の山地政策に対する先住民族社会の下からの多様な反応が見いだすことを目指した。

## 4. 研究成果

3.に示した一次資料の公開遅延により、結果として二次資料を徹底して収集する時間を確保できた。この作業では、たんに日本や台湾における先住民族研究の動向を丹念に追うだけではなく、台湾の各エスニック・グループの「記憶」に関する資料を収集することにもつながった。

台湾には先住民族のほか大多数を占めるホーロー人、そして客家人それぞれの戦争に対する記憶に差異がある。外省人（1945年以後に国民党政権とともに中国本土から台湾へ渡来した人々で、党・政・軍・文化機構において要職を占め、人口上のマイノリティではあるが、戦後台湾国家において構造的優位を占めていた）も多様な民族を含むゆえ、戦争への記憶も一元的ではない。台湾内部の記憶には多面性があり、その上に国民党一党支配時期の歴史観、すなわち大陸反攻が最高の国家使命となり、5,000年の悠久な「中原」の歴史が正統とされるものが覆いかぶさっていた。なお近年の台湾では台湾大の歴史観が形成されつつある。

本研究代表者はかつて、戦後台湾における先住民族の歴史観や記憶について基礎的な説明を行った（『台湾先住民族社会の戦後過程』『アジア・アフリカ地域研究』第15-1号、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、2015年）。上記拙論を土台とし、韓国朝鮮近現代史研究を引きつつ、戦後台湾社会と日本観、歴史観の全体像を描くこととした。その際、台湾の脱植民地化は台湾が台湾として自らのアイデンティティや国家の形成という形態で進行したのではなく、中華民国が台湾を「中国化」するという「代行」された形で進行したという視角を用いて作業を進めた。そして脱植民地化の有り様の説明する題材に相応しい学校教育の検討などを通して、植民地時期生まれの世代と戦後世代の間で記憶が継承されず断絶し、戦後台湾では「日本」はあまり批判すべき対象とならず、「他者化」し国民統合の機能を果たさなかったことを指摘する論文（査読有）を刊行した。その具体的内容は次のとおりである。

戦後台湾（1945～）における「日本」は為政者にとっては日中戦争を戦った相手である。1911年から中華民国が代表してきた「正統中国」に重きが置かれ、「日本」は日清戦争以来の「国難」をもたらした最大の「侵略者」として位置付けられ、近代史の記憶は国民党史観に取って代わられた。歴史記述の中の「日本」は侵略と虐殺をもたらした抗日戦争の敵であった。ところが植民地期台湾生まれの人々にとれば、「日本」は台湾を50年統治した存在であった。つまり戦後台湾社会では長らく上からの一方的な「中国化」と「脱日本」の国民統合がすすめられ、下からの視座である植民地統治を経た台湾の人々にとっての「脱日本」との間には齟齬が生じていた。学校では為政者の歴史観や敵認識が教育され、植民地台湾での記憶や経験は学校では継承されず断絶した。家庭内ですら下の戦後世代とは共有できなかった。しかも街からは為政者の意図に拠り「日本」が払拭され、戒厳令と白色テロが吹き荒れ、人々は沈黙を保った。そこには植民地時代の被統治者による脱日本化の意思が示されることはなく、それどころか「日本」たることが自己を保つツ

ルにすらなった。

同じ日本の植民地統治を経た韓国では、民主化以前から「脱日本」が為政者、国民がともに定言命令として共有されていたようである。ところが台湾では為政者の意図に反し、ひとたびかつての「日本」が到来すると、植民地期生まれの人々は熱狂し「日本」に引き寄せられた。こうして脱植民地化が代行されたことにより、他の諸地域とは異なり台湾社会全体として日本をかつての「敵」の対象や「他者化」せず、それどころか戦後経験を経た人々には自己防衛ツールにまでなり、戦後台湾では「日本」が「相対化」されてきたと論じた。

ここで本研究課題に直接かかわる説明に戻す。一次資料の公開遅延は、研究代表者に他のアジア諸地域の少数民族研究、特にタイ北部の少数民族研究に接する時間をもたらした。1950年代以降のタイでは統治領域の概念が北部山地まで到達しタイ国境管理の重要性が増した。非タイ系民族は「山地民」と一元的に統治され、「タイ化されるべき他者」に位置づけられ、教育・仏教・開発など多岐にわたる山地民政策の対象となった。外部からの侵入者を防ぐ山地統治のため、台湾の先住民族も「中国人化されるべき人々」とされた経験をもつ。同時代的に他の少数民族地域で起きた事象の研究から、本研究課題を遂行するうえでの分析手法を学ぶことに繋がった。

その後、楊肇嘉の個人文書（台湾省民政庁長時代）公開の通知を受け、台湾での一次資料収集を進めた。さらに大学図書館で当時の新聞資料（マイクロフィルム）閲覧と複写作業を進めた。こうした作業を通じて、本研究課題を論文の形にするうえで必要な一次、二次資料はすべて入手するに至り、執筆作業を開始している。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

森田健嗣、戦後台湾における脱日本化再考——代行された脱植民地化の視角から——、アジア・アフリカ言語文化研究、査読有、第93号、2017、5-24

〔学会発表〕（計1件）

森田健嗣、戦後台湾のオポジションによる言語権の主張——議会の議論に注目して——、中国語文学会第151回定例学術研究発表会、東京語文学院（東京都豊島区）、2015年12月13日

〔その他〕

ゲストスピーカー

「地域文化論（人の移動とアジア共同体の展望）」（東京大学教養学部1、2年生向け講

義) 2016年10月7日)

森田健嗣「台湾の歴史と現在における人口移動の影響」

生涯学習講座講師

「台湾の昔と今～日本周辺のここが知りたいシリーズ」

森田健嗣「台湾の昔と今 台湾現代史—台湾人の日本観と民主化」2016年11月19日

森田健嗣「台湾の昔と今 台湾先住民族の過去と現在」2016年11月26日

主催：鎌倉市教育委員会

企画・運営：鎌倉市生涯学習推進委員会

場所：深沢学習センター（きらら深沢）

台湾研修事前講習担当講師（東京大学教養学部トライリンガル・プログラム（TLP）中国語）

森田健嗣「現代台湾における日本観、日本認識について（1）」（2017年1月10日）

森田健嗣「現代台湾における日本観、日本認識について（2）」（2017年1月11日）

森田健嗣「現代台湾の若者について」（2017年1月12日）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森田 健嗣 (MORITA, Kenji)

東京大学・大学院総合文化研究科・教務補佐員

研究者番号：20761422